

お寺の社会性

—生奥坊主のつぶやき—

拾五

竹中尚文

1. マイタイム

「It's my time.」

私の隣でアンドリューがつぶやいた。

美しい夕暮れだった。昼間は五月晴れと言うのか、大陸を思わせるような青空がひろがり、そのまま夕暮れを迎えた。私たちは、お寺の山門を西向きに出た所で、沈む夕日を眺めて足が止まった。

アンドリューは私たちのお寺の本堂で、子供達に英会話を教えている。私たちのお寺では、子供をお寺に呼び込む手立てとして、本堂で英会話を教えている。

彼のつぶやいた「my time」はどんな意味なのだろう。

2. 聖徳太子と父

日本の仏教寺院にある絵や像で最も多いのは聖徳太子ではないか

と思う。日本の仏教は聖徳太子より始まったと言える。6世紀前半に仏教が日本に伝来し、6世紀末から7世紀初頭に聖徳太子が仏教を積極的に受け入れて、日本に仏教が普及した。8世紀の奈良時代には国家仏教となっていく、と言うのは教科書的説明である。ここで、取り上げたいのは聖徳太子がどのような仏教観を持っていたのか。

聖徳太子は、仏教を理論的に理解し、個人的信仰と捉えていたのではないかと思う。それは呪術的でも先祖崇拜的でもなかったようだ。

聖徳太子は、そのカリスマ性のために伝説の多い人である。彼についての伝承がすべて真実とは限らないのだから、その明確な思想を解き明かすことは難しいようだ。私が注目したいのは、聖徳太子は仏教を呪術的なものではなく教理的に理解

していた処である。それは彼の著作と言われる、「三経義疏」（『法華義疏』『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』）の存在がある。これらは、三つの経典を論理的に注釈したものである。この三経義疏が聖徳太子の著作であるかないかの諸説はあるが、いずれにしても聖徳太子は仏教の教理を熟知していたわけである。中国にシルクロードを経て仏教が伝わった頃、在来の宗教である道教とどちらが優れているかと、呪術を競った話がある。これは、宗教が伝わった初期の頃、その思想を体系的に理解することがいかに難しかったかを示す話しである。

また、聖徳太子が仏教を個人的な信仰としていたことについて、反論もあろうかと思う。聖徳太子は『十七条の憲法』を定めて、その中で「篤く三宝を敬え」と言って、仏教をその政治思想の基礎にした。しかし、それは奈良時代の国家仏教につながる。国家仏教というのは鎮護国家を祈るものであろう。一方、聖徳太子は「世間虚仮、唯仏是真」という言葉を残したと言われるよう

に、国家や社会を真実ではないと捉えている。仏教を内的真理と捉えている。

話しは変わるが、私の父が死んでから9年になる。父との親子仲は、よかったとは言えなかった。生き方も人生観も異なった。だから、よく衝突を繰り返した。衝突をするからと言って、理解し合えなかったわけではない。

父が60代半ばの頃だったと思う。ある日、私に電話をしてきた。ずっと阿弥陀さんの前で手を合わせてきたが、りっぱな人にはなれなかった、とだけ言った。

父親も浄土真宗の僧侶であった。浄土真宗は、自分がりっぱな人になるためにお参りをするような教義を持たない。父親はそれを知らなかった訳ではない。私は、父が本尊の前に一人だけでいる姿を思い浮かべた。父が一人で本尊の前で、自己と向き合っている姿を想像した。

父の死後、私の最も好きな父の姿である。

3. Your time

アンドリューの言った「my time」はどんな意味なのだろう？あなたは「your time」を持っているのか。私たちは生活の中でどれ程の頻度で自己と向き合うのだろうか。自己と向き合うことにどれ程の時間をさいているのだろうか。

4. 世に仏

私は、一時でも自己と対峙できればいいというのではない。それは必要なことであるが、それで十分ではない。ほんの少しばかりの自己との対峙の状態にとどまるのは、難しく危険でもあると思う。私は、稚拙な宗教観がカルトと無宗教の始まりだと思っている。聖徳太子が呪術に流されることなく、教理を理解し自己の内的なところに信仰を深めたのは、私たちの道標である。

聖徳太子の仏教観は、信仰は個人的なことのようだ。日本仏教の特徴でもある家の宗旨を肯定するものではない。

私はしばしば「お寺を移れるの？」という問いを受ける。信教の自由が保証されているこの社会で、

お寺を移れるのは当然である。「ウチの住職は、カネの話しかしない」「ウチの住職は、お経が済むとそそくさと帰ってしまう。まともに話しもしない」「ウチの住職は時間にルーズだ」「ウチの住職は上から目線で、私たちを導いてやるという態度だ」「ウチの住職は、お参りにも来ない」などと不満をたくさん聞くが、実際にお寺を移ったと言う話しは、あまり聞かない。

その理由に、お寺の付き合いは長期間にわたるのだから、移るにはそれなりの決断が必要になるのかもしれない。移ったところで、お寺はどこも同じようなものだろうと言われていたのかもしれない。

私のこの生臭物語の第4回でお話をした、息子さんを亡くしたご夫婦に後日談がある。私はこのお家に七日参りで二ヶ月足らずの間、お参りをした。家族それぞれが、涙を流しながら明日を生きようとしていた。ご両親もご兄弟も、計り知れない悲しみを抱えながらも生きる姿に私は心打たれるだけであった。

四十九日が過ぎた頃に、父親が私

を訪ねてきた。数日前に息子が勤めていた会社の社長が来た。息子さんが亡くなられて、数名の会社ではあるが、その社員たちが動揺している。そのことについて、社長がよくお参りをしているお寺に相談に行ったらしい。そのお寺の住職が言うには、若くして亡くなった社員はまだ迷いの世界で苦しんでいる。だから自分が回向してやるから、その社長に回向料を準備するようにいった。社長の回向料だけでは不十分なので、両親も回向料を準備して参拝するようにいったそうである。

父親は私に、自分はそんな金額の回向料も準備できない。それ以上に息子が迷いの世界で苦しんでいるならば、とっても悲しいと言う。父親は、息子は本当に成仏できていないのか、と私に尋ねた。

私は、迷いの世界で苦しんでいるのはその住職だろうと思った。偉そうなことは言えない、私も金欲世界での迷いの民である。

息子が仏に成ったかどうかにつ

いて証拠写真があるわけではないが、私は彼が仏に成ったと思っている。仏に成ったからこそ、両親は手を合わせたのだ。両親はその仏に救われてきた。両親と兄弟が明日を生きられるようになったのは、仏の力だと思う。彼らの生きる姿が何よりの証拠だと思う。

私がここで言いたいのは、この社長の選択である。私たちの社会は需用者の選択が供給者を育てる。この社長の選択がこのまま続けば、人の悲しみを収入源にするお寺が繁盛することになる。そのようなお寺が増えることになる。拝金教のお寺も、欲望の世界を跋扈する坊さん^{ぼっこ}も、それを育てた人々がいる。

軽い気持ちでお寺を訪れるのも悪くない。観光気分でお寺に出掛けていくこともあるだろう。でも、いつか自己との対峙する時に会い、仏の声を聴き、仏を受け入れる心を持ってほしい。お寺はそのような舞台を提供する場所でありたい。